

### 結果の整理

(1) 遊具を使ったあそび、例えば、砂場、ジャングル等、  
(2) 遊具なしであそんでいるもの、例えば、やたらに走り廻ったり、両足とびをしているようなもの、(3) 遊具でない道具を使ってあそんでいる。地面にレール、河、鉄橋などを描いて汽車ゴッコをしたり、ふとんを敷くとでんぐり返しをするなど、の三つに分類してみると、60%がやはり遊具を使っていることがはつきりした。

体のどの部分を使っているか、体全体を使って遊んでいるものが

94%もあり、極く一部しか使っていないと思われるものは僅かに6%で、三才児の運動あそびが全身運動を中心にしていることも確かになった。更に位置の移動といふことから観察してみると、あそびの中で78%も位置の移動を楽しんでいることがわかり、三才児の少しあじつとしていない生態も明らかになつた。

興味の中心 動くことが多いが、この調査が十月のためか、技術

を伴う運動遊びが49%もあった。(大会発表論文抄録35頁参照)このことを四月の入園期と対照してみると、ただむやみに走り廻ることから、次第に高い技術を伴なうものに向つて発達していく過程がある程度把握のではないかと考えられる。

また遊びの内容から質的に分類してみると、その中でも目的をはっきりもつて遊んでいるものとそうでないものとにわけ、更にその目的が遊具・道具を使って構成的な遊びに発展していくものとそれ自身を楽しんでいるものとに分析していくと、三才児の遊びはまだ遊具そのものを使って楽しむ段階であることが解る。しかし構成されたあそびが25%もみられることは次第に未分化のものが漸次、分化し、更に興味の中心も技術的な、構成的なものに向つていることが察知出来る。

この考察の結果から私達は、現在、三才児の保育計画の中で与え

ていた運動遊びの検討や、適当な遊具の整備計画、更には、指導の方法としても興味を中心とした融通のあるあそばせかたの研究をするための基礎的な資料として、或る程度役立つことが出来ると考へている。しかしこれはあくまでも中間報告であつて三才児の調査を行なうことにより、研究目的を更にあきらかにすることが出来るものであることはいうまでもない。(大会発表論文抄録34—38頁)

## 園児の睡眠に関する研究(第3報)

長野県保育専門学院 小松卓郎

中川ちえ

園児の睡眠、殊に午睡をどのように理解し、どのように取扱うべきか——という問題は、極めて重要な問題でありながら、常識的なあまりに却つて思いがけない過誤も招かれやすい状態があつた。例えば、夏季の気象条件が全く異なる東京での「必要午睡時間」が、そのまま長野に当てはめられる、というような「標準化」から午睡状態の悪い子が、直ちに保育技術や愛情の場で論議されたり、問題児とされたりするような事実が、かつてなかったといえるのだろうか?われわれはこの角度から標準必要睡眠時間に対する家庭での、また園での時間的関係を調査して、午睡の必要時間に地域性のある事を明らかにし、また午睡への馴化、ねつきの「よし」「わるし」季節性等に体质学的な差異のある事を第2報までに報告したが、今回は受持保母及び母親等が「おやすみなさい」といってから園児の実際になつくまでの時間を観察記録し、これを中心に三十四年の七月か

第1表 家庭における就寝時刻及び睡眠時間

| 区分け<br>月別就寝時間組 | 家庭における就寝時刻及び睡眠時間 |                     |                        |              |            |                        |              |              |                  |      |      |       |
|----------------|------------------|---------------------|------------------------|--------------|------------|------------------------|--------------|--------------|------------------|------|------|-------|
|                | 7月               |                     |                        | 8月           |            |                        | 9月           |              |                  | 平均   |      |       |
| 就寝時刻           | 起床時刻             | 睡眠時間                | 就寝時刻                   | 起床時刻         | 睡眠時間       | 就寝時刻                   | 起床時刻         | 睡眠時間         | 就寝時刻             | 起床時刻 | 睡眠時間 |       |
| 年長             | 時分<br>9:14       | 時分<br>6:52<br>(46') | 時間分<br>9:36<br>(11:23) | 時分<br>9:11   | 時分<br>6:52 | 時間分<br>9:41<br>(11:10) | 時分<br>9:41   | 時分<br>7:12   | 時間分<br>10:24     | 9:06 | 6:57 | 9:51  |
| 年中             | 8:46             | 7:24<br>(18')       | 10:38<br>(11:53)       | 8:39         | 6:44       | 10:05<br>(11:18)       | 8:19         | 6:22<br>(30) | 10:03            | 8:36 | 6:51 | 10:15 |
| 年少             | 9:15             | 6:57<br>(54)        | 9:42                   | 9:19<br>(20) | 6:53       | 9:34<br>(10:31)        | 8:58<br>(30) | 7:37<br>(15) | 10:39<br>(11:33) | 9:14 | 6:58 | 9:44  |
| 平均             | 9:05             | 7:07                | 9:58                   | 9:03         | 6:49       | 9:46                   | 8:38<br>(27) | 6:58<br>(15) | 10:20            |      |      |       |

平均午睡時間

1:25

1:11

1:18

ら本年三月まで、関係事項を調査、その資料の一部を整理した。  
 第1表にみると、対象は付属実習室の園児であり、前回までの農村部園児との比較をも兼ねた。  
 第1表にみると、家庭での睡眠時間は、農村部とほぼ同様に、比較的よくとつており、この地域での夜の涼しさを思われる共に、複雑な職業、環境構成を持つ市街地でも、園児の場合、睡眠に対する気象条件の占める地位を改めて確認し得た成績であった。

また、第2表にみると、家庭での9~10分と著しい差をみせており、単に園での午睡という環境的要因のみにたるものか、まだねむくならない時間に「午睡」によるものか、生理的原因によるものか、午睡開始時

刻の適不適について、改めて吟味を要すべき重大なる示唆を含んでいるものと言い得よう。  
 小坂動体的体質学では、成人において、ねむくなる時間に体質差のあることを証明している。家庭

第2表 「ねつき」の時間

| 組別<br>月 | 午睡時のねつき     |             |             |             | 家庭でのねつき    |             |            |             |
|---------|-------------|-------------|-------------|-------------|------------|-------------|------------|-------------|
|         | 7           | 8           | 9           | 平均          | 7          | 8           | 9          | 平均          |
| 年長      | 分秒<br>32:19 | 分秒<br>29:46 | 分秒<br>30:28 | 分秒<br>30:35 | 分秒<br>6:51 | 分秒<br>10:00 | 分秒<br>5:53 | 分秒<br>11:05 |
| 年中      | 32:26       | 38:19       | 31:15       | 32:39       | 12:00      | 11:22       | 7:00       | 10:49       |
| 年少      | 36:37       | 36:26       | 38:35       | 35:29       | 8:00       | 10:00       | 11:15      | 9:26        |
| 平均      | 33:48       | 34:50       | 33:29       | 34:02       | 8:57       | 10:27       | 8:03       | 9:09        |

第3表

| 区分け<br>グループ<br>64名中           | 園における平均     |             |              | 家庭における平均   |            |             | 年間        |           |           | 動態的体質類型 |      |      |
|-------------------------------|-------------|-------------|--------------|------------|------------|-------------|-----------|-----------|-----------|---------|------|------|
|                               | ねつき午睡時間     | ねつき午睡時間     | ねつき午睡時間      | 就寝時刻       | 起床時刻       | 睡眠時間        | 病日        | 病日        | 欠勤日       | SE型     | M型   | WM型  |
| I(ねつきよい<br>よくねでいる)            | 分秒<br>27:01 | 時間分<br>1:25 | 時間分<br>11:13 | 時分<br>8:59 | 時分<br>6:49 | 時間分<br>9:49 | %<br>95.4 | %<br>44.0 | 日<br>12.4 | 78.0    | 17.6 | 70.6 |
| II(ねつき平均よ<br>りよい。睡眠<br>が浅い)   | 38:15       | 1:13        | 19:28        | 9:06       | 6:58       | 9:52        | 100.0     | 43.0      | 11.4      | 79.0    | 31.3 | 62.5 |
| III(ねつき非常に<br>悪い。ほと<br>んどねない) | 60:16       | 1:08        | 9:26         | 8:56       | 7:27       | 10:31       | 100.0     | 68.0      | 27.6      | 81.0    | 60.0 | 40.0 |

での睡眠時間が十分であり、その上起床時刻の遅い幼児—その60%はS-E型の幼児—は、これだけの数値では結論は出し得ぬにして、も、午睡時の「ねつき」が極めて悪く、午睡時間の短かい事が第3表にも示されている。

園において、全く「ねない」幼児もS-E型であった。これらの園児の場合、技術や所謂問題児としての側に責を求むべきか、その側に責を求むることが誤りか、第2表の成績と共に三思を要する問題であろう。第3表では記録の整備されたものについて、総合的に午睡状態のよい子(Ⅰ)・おどる子(Ⅱ)・わるい子(Ⅲ)の三グループについて観察した。園の午睡に抵抗を感じ、またスムーズにその中に入つて行かれない幼児らは、それぞれの一般的の原因や体質と共に、罹病傾向、いわゆる健康状態などにも一連のつながりのある傾向が認められる。今後の報告において、更に問題点を追究したいものと思う。

## 未熟児の出生とその発育

日本女子大学 長竹正春  
加藤翠

昭和27年4月より33年3月までの6年間に、東京警察病院及び関東通信病院の両院において生まれた未熟児について、妊娠時、出生時の状態、その後の身体精神発育の状態等について調査したもので、なお、現在引き続き知能検査その他の追加調査を実施中である。本調査の結果が、保育担当者の方々によつて、少しでも役立てていただければ幸である。

未熟児出生の割合は、年次的に減少の傾向が見られ、両院の6年間の平均は8.8%であった。また、未熟児が生下時体重によって、四段階にわけて見ると、生下時体重の少ない者は年次的に減少の傾向が見られた。過熟児出生の割合も年次的に増加の傾向が見られた。身長が大となるに従つて比体重も増加の傾向が見られ、身長と体重の相関は0.11であった。(N=130)

生下時仮死状態で生まれたかどうかについては、生下時体重が少なくなるにつれて、仮死状態で生まれた者の割合が多く、1500g以下のグループでは、 $1/4$ が仮死で生まれており、2301g以上のグループでは $1/8$ が仮死で生まれている結果であった。

母親の妊娠中の疾患異常は7.4%にも達しており、とくに妊娠中毒症が、全対象の約 $1/4$ の高率を占めていることが注目された。また、出産時の異常も対象の半数が報告されており、早期破水18.6%、早産13.6%が注目されるものであった。また出産時に、鉗子その他の補助手段を用いたものが、対象の $1/3$ —33%を占めており、中では帝王切開11.0%が高位を占めているものであった。

保育器は、対象児の半数がこれを利用しており、生下時体重が増すに従い、利用率が下っていることは当然である。

対象児中、きょうだい中にも未熟児として生まれた者をもつものが、30%近くも見られた。対象児のその後の身体発育の状態は、昭和32年度厚生省発表の国民体位の全国平均値の各年令の値を100として、対象児の各年令における身長、体重の平均値がどのような割合になっているかについてまとめた結果からみると(大会抄録47頁IV表)、約2年で標準に追付いており、生下時体重の少ない者程、発育速度が早かつた。